

—再起に賭けた溶接工—

ポリテクセンター兵庫
(兵庫職業能力開発促進センター)

頃末 寛

それは3月まだ肌寒く、外は小糠雨降る夕方近くに電話を受け取ったときだった。ポリテクセンターの正面に向いたところ一人の男が私を待っていた。当時、私は企業に向いて職業能力開発のアドバイスをしていた関係から、このセンターのことをどこからか情報を知り得て面会にきたのだと相手を推察した。私は当時40代で彼は50代半ばであったと思う。このような場所は彼にとって苦手なのか、やや緊張しながら^{とつとつ}訥々と用件を切り出した。

要約すると以下のものであった。彼は若い頃溶接を請負でやっていたが、事情があって一時期トラックの運転手をしたものの、家族の生活の安定のために元の溶接工に戻ったが、一昨年建築現場で事故に遭い片足の指5本を切断するという大怪我をした。今年になって、療養とリハビリが終わってそろそろ働きたいのだが、50歳半ばでもあり、一度怪我をした人間は敬遠され、おまけに溶接技量資格もない。人づてに聞けば、ポリテクセンターは資格取得にも懇切に指導してくれると聞き及んできた、ということなのだ。

足が不自由とあれば重い物を担いだり持ったりすることは難儀であり、現場での雑役仕事もできかねる。可能であれば溶接技量資格の中でもグレードの高い資格を取得すれば待遇も良くなると考え、そのことを彼に話したら、ぜひその技量資格に挑戦したいとの意思堅く、われわれ二人はその目標にセミナーを通して二人三脚で歩むことになった。いろいろ溶接指導をしているうちに、彼の溶接の荒っぽさをまず矯正するのにかなりの時間を費やした。併せて

学科試験の問題も講義するのだが、彼の経歴からみて鉛筆を持つ習慣がないのか理解力と記憶力は低かった。いったいこの先どうなるものかと前途暗澹たる気持ちになったが、技能の伝承に年齢の上下は関係なく、私は10歳も年上の男を怒鳴りつけたことも何回となくあった。もう一ランク上の技能を目指すときに必ず壁が立ちはだかり、それは本人にとって諦めに近い気持ちになるのだが、そんなときは彼をわざと怒らせて「なにくそ！」と思わせる気持ちに持っていかなければならない。そう、彼と私が目指しているのは近畿二府四県の本職の溶接工が受験しても合格率は4割5分とされる日本溶接協会の溶接受験種目の「N-2P」という課題であり、それゆえ値打ちもある。

足の不自由な中年過ぎの男が年金もなしにこれから働くのであるから、あと15年はこの職業で飯が食える保証が要る。働く気力があっても65歳からは現場では不安全だということで締め出されがちだが、グレードの高い溶接資格を手に入れば引っ張りどころである。私は何が何でもこの男にその資格をとらせようとする気持ちが湧いた。それは溶接指導員としての意地であったのかもしれない。

今年彼は4回目の更新受験であるから、あれから12年働いてなお現役である。人生の後半に大怪我をして、見事社会復帰を果たした彼に拍手を送り、そのお手伝いができる「機構」という職場に喜びを感じた。